青潮小

主体的に学ぶ子どもの育成

―問題解決的な学習を取り入れた授業づくりを通して―（３年計画の３年次）

校長　　三角　浩司

１　研究主題について

本校では、教育目標である「たくましく　心美しく」の具現化のために、一昨年度から「主体的に学ぶ子どもの育成」という主題で、全教科において研究を進めてきた。昨年度までの研究により、算数の授業では、導入場面で三角定規と自分のかいた三角形を比較し、「どんな三角形でも内角の和が１８０度になるか。」について導入場面で問いの共有ができる課題提示をしたこと、特別の教科道徳の授業では、問題提示の工夫をすることにより、児童の課題解決意識を高めることができた。また、自力解決ができるようにペア学習やグループ学習などの場を工夫することで、見通しをもって考える児童が増えるなどの成果が見られた。一方で既習事項を基に自分の考えをしっかりともたせるための話合い活動の工夫や「主体的に解決したくなる問い」へとつなげていくための教師の働きかけの工夫が課題としてあげられた。

そこで、今年は、昨年度までの研究を踏まえ、問題解決的な学習を通して、児童が課題解決に向けて主体的に学ぶことができるように、意欲を高める課題提示や教材、発問の工夫、見通しをもたせ、解決に向けた場の設定の工夫をする。児童に「あれ、どうしてかな。」から「答えを出したい。分かりたい。知りたい。」と思う課題意識をもたせる工夫や「何を学習したのか。」を明確にした振り返りを行わせることで、自らの学びについて客観的に捉え、次への問いにつなげることができると考える。

今年度の学校目標は、「よさを生かし、よく考えて取り組む子どもの育成」で、学びづくりの重点施策は、子どもたちの確かな学力の向上（基礎・基本の内容の定着）である。児童が自ら考えたい、調べてみたいと主体的に課題に取り組む授業を重ねることで、学力の定着を図っていきたい。

２　研究のねらい

児童が自ら課題を見つけ、課題解決に向けて主体的に学ぶことができるようにするために、教材や発問等の「しかけ」による問いの共有や見通し、解決に向けた場の設定をどのように工夫すればよいか、問題解決的な授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

「あれ、どうしてかな。」から「答えを出したい。分かりたい。知りたい。」と思う課題意識をもたせる工夫や「何を学習したか。」が明確になる振り返りの工夫をすることで、主体的に学ぶ子どもを育成できる。

４　研究の内容

(1) 児童が問題を発見し、主体的に問題解決にむかえるように、教師のはたらきかけを工夫する。
(導入から課題設定まで)
・教材の工夫
・発問の工夫

(2) 見通し、解決に向けた場の設定の工夫
・書く活動
・話合い活動
・振り返り

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	授業研究	全体会等
7	6	○第１回研究授業・協議（4 学年　国語）授業者　教諭　滝本　由佳 題材名　「アップとルーズで伝える」 ・文末表現に着目したり大切な言葉を探したりする活動を通して、筆者の考えや段落のつながりをとらえることができる。	
9	２８	○第２回研究授業・協議（2 学年　算数）授業者　教諭　加藤　愛理 題材名　「かけ算（１）」 ・かけ算の用いられる場面を式に表し答えを累加で求めることを通して、身のまわりのものをかけ算で表すことができる。	
１１	１７	○第３回研究授業・協議（要請訪問　５学年　算数）授業者　教諭　坂本　健一 題材名　「単位量あたりの大きさ」 助言者　八戸市総合教育センター副所長兼主任指導主事　松橋　祐哉　先生 ・１人あたりの畳の数を考えることを通して、混みぐあいを比べることができる。	

(2) 一般研修

月	日	内容・講師　等
5	２５	・特別支援教育（個別の支援計画作成のしかた、保護者への対応） 講師　淡路　美樹子（青潮小学校 さくら学級担任）
6	２２	・救急法（AED・熱中症対策） 講師　八戸市東消防署　職員
8	２３	・１人１台端末活用研修会（授業の中での実践例発表） 「スクラッチ」を用いた正多角形の作図について　教諭　粟津　宏治 「ジャムボード」の活用例　教諭　小笠原 真理子 「電気と私たちのくらし」～理科 プログラミングの活用～　教諭　簗瀬　えみ 音楽・図工で活用できるフリーソフトの紹介　教諭　中川原　泰文
１０	１９	・心のケア支援事業「困っている子どもたちへの支援について」 講師　八戸学院大学短期大学部　幼児保育課　教授　野口　和也　先生

６　研究の成果

(1) ・発問の工夫をしたり児童の考えを可視化したりすることで、児童一人一人が自分の考えをもつことができるようになってきた。
・問題解決への必要感をもたせることで、意欲的に取り組もうとする意識が高まった。

(2) ・文字と写真や絵と図などを対応させるなど、導入部分を工夫することで、解決への見通しをもって取り組むことができた。
・課題解決に向けた話合いを重ねることで、まとめや振り返りを行うことができるようになってきた。

７　研究の課題

(1) 「思考のズレ」から漠然とした問いを持たせることができたが、明確なめあてとして共有させる点で課題が見られた。

(2) グループでの話合いの目的を共有するための問い返しや揺さぶりなど教師のしかけの工夫が必要である。

（記入者　中川原　泰文）